［ヴィハーラ プロジェクト］
March 2023
Vol.8

Vihāra Project

科学研究費補助金基盤研究（A）
「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」
（課題番号：22H00002 英文タイトル："Monasteries and Secularity in Indian Buddhism from the Gupta Period Onward"）

ニューズレター第8号

本プロジェクトの目的と体制

本研究プロジェクトは、先行する基盤研究（A）一般（課題番号：18H03569、研究期間：2018～2021年度、研究課題名：グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究）と内容的に連続する。今回の研究の目的は、インド仏教における僧院と世俗性との関係について、異なる研究分野と方法論に基づいた複数の研究班の連携を通じて総合的に考察することである。特に、密教思想の台頭に伴って世俗性が顕著になった、グプタ朝以降のインドの諸地域の僧院を対象として調査を進める。前回の研究の主眼は、僧院の観点からインド仏教衰退史観を再考することにあった。それに対して、今回の研究では僧院と世俗性との関係に視座を移すことになる。研究テーマは異なっているものの、僧院（vihāra）という観点は両者に共通していることから、引き続きVihāra Projectという通称を使用することとした。また、同様の理由から、本ニューズレターを第8号（前回の研究では第7号まで刊行済み）とすることをご理解いただきたい。

宗教と世俗性との関係は普遍的な問いである。仏教研究においても両者の関係は古くから扱われてきた。その主要な論点としては、(a) 在家主義（もしくは在家信者）、(b) 世俗権力（との関わり）、および (c) グプタ朝（320年～550年頃）の興起以降に台頭したとされる密教思想（仏教タントリズム）の3項を挙げることができる。このうち (a) と (b) は、すでに密教思想以前の大小乗仏教にも存在していたものである。しかし、そこに (c) 密教思想（その教理・実践体系には殺生の容認や性的儀礼も含まれる）が加わることで、それ以降の仏教思想における世俗性がより顕著になったと言えよう。

その結果として尖鋭的なかたちで現れてくる問題の一つに、戒律論がある。上述のように、密教思想には出家者の戒律から逸脱する部分が出てくる。それにもかかわらず、そのような密教思想はグプタ朝以降の僧院でも重要な位置を占めるようになっていく。密教思想の中にも、三昧耶戒（samaya）などのように戒律にあたる概念は存在しているが、それらは殺生などの禁忌を容認する性格を持つ場合がある。そうした密教的な戒律が、僧院においてどのように実践されていたのか、さらには小乗（伝統的部派仏教）の律や大乗戒といかなる関係にあったのかという点については、未だ不明の点が多いと考えられる。それと同時に、グプタ朝以降のインド仏教においては、(a) 在家信者と (b) 世俗権力の両者が (c) 密教思想に関わるようになる。たとえば、密教的な尊格を (a) と (b) が供養・礼拝し、密教的な儀礼・信仰を実践する際に、僧院はいかなるかたちでどの程度関与していたのであろうか。これらの問題については、近年では、在俗の密教聖者（siddha）と僧院との関連や、グプタ朝以降の大小の僧院と世俗権力―そこにはパーラ朝（8世紀半ば～12世紀末）のような王朝に加えてより小規模な地方の政体も含まれる―との関連も論じられるようになっている。

インド仏教の世俗性に関わる上述の (a)～(c) の3項は、それぞれ周知の論点であった。しかし、グプタ朝以降顕著になったインド仏教の世俗性を、特に僧院との関係に着目して有機的に理解し、インド仏教史上に新たな見取り図を作成すべきではないかというのが、本研究の問題意識である。

前回の研究においては、各研究班がさらに取り組むべき個別的課題も新たに浮かび上がってきた。それらの課題を総括したところ、いずれも「グプタ朝以降のインド仏教の僧院と世俗性との関係」という枠組みのもとで包括的に論じることが可能なものであった。この枠組みを扱う際には、在家主義（在家信者）や世俗権力に加えて、密教思想を

抜きにして考えることはできない。以上のことから、上述の(a)～(c) の3項に着目しつつ「僧院と世俗性との関係」を学際的・多角的に考察することの必要性に思い至ったというのが、今回の着想の経緯である（図1を参照）。

（図1）本プロジェクトの方向性

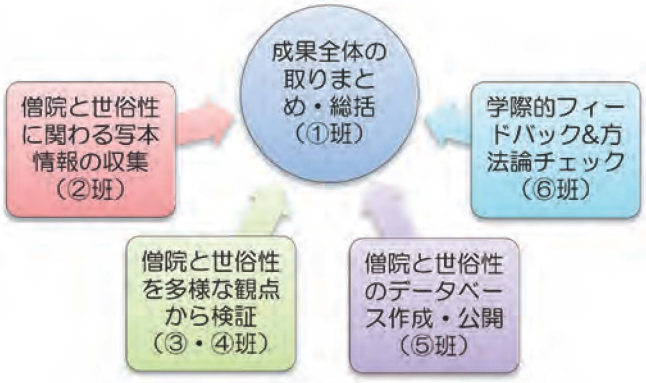
僧院と世俗性との関係を対象とした従来の研究状況における主な課題としては、以下の点を指摘することができる。

(1) 僧院に関する多くの断片的情報が異なる研究分野（写本・碑文・美術・考古学など）にまたがって存在しているにもかかわらず、それらを統合的に理解しようとする試みに乏しかった点

(2) そのような僧院に関する資料が映し出す「世俗社会の側面」を精査・収集し、さらにそれを複数の研究分野間で有機的に関連付けて理解しようという意識が不十分であった点

僧院に関する資料は、断片性を伴うとはいえ、写本・碑文・美術・建築など多岐にわたっており、豊富な先行研究も存在している。そのような僧院に関する資料に映し出される「世俗社会の側面」を収集し、さらにそれを複数の研究分野間で有機的に関連付けて理解しようという試みは、これまで十分ではなかったのではないか。また、本研究は、インド（宗教）史ではしばしば扱いが難しいとされてきた、世俗社会の一般民衆（在家信者）の振る舞いまでも可能な限りすくい取ることを企図している。具体例を挙げるならば、僧院の周囲の情報も提供する Sirpur（Chhattisgarh 州）や Kanheri（Mumbai 西部郊外）、Bodhgaya（Bihar 州）などにおいては、僧院の周辺における在家信者の供養礼拝の痕跡などを視野に入れつつ、僧院と世俗性との関係を考察する余地が残されている。加えて、本研究は近年の仏教学で議論されている「インド大乗仏教の興起における出家・在家の果たした役割」の問題とも無関係ではない。この問題に僧院の視座から光を当てる試みは未だに少ないが、それはインド大乗仏教研究が複数の研究分野の協力によって僧院の像を結ぶ段階に至っていないことも示唆しているのではないか。僧院（出家者）と世俗性（在家主義・在家信者を含む）を扱う本研究は、この問題に対する方法論のモデルを提供することも将来的に期待できよう。

本研究は、以上のような学術的背景を踏まえつつ、学際的方法論を用いて総合的な観点から研究を進めようとするものである。前回の研究と同様、本研究もまた、国際的な分野横断的プロジェクトとして、6つの研究班、すなわち①総括班、②写本文献資料研究班、③碑文資料研究班、④美術・建築・考古学研究班、⑤データベース作成班、⑥外部評価班から構成される（ニューズレター第1号を参照）。各研究班の役割は図2に示す通りである。



（図2）各研究班の役割分担

本プロジェクトの研究期間（2022～2025年度）における具体的目標は、次の3点である。

(I) 各班は「僧院」というテーマのもとで最先端の研究成果を総括すると同時に、新たな知見の獲得に努める。その際、他班の研究者と共に学際的視点から考察を進める。

(II) (I) と連動するかたちで、「インド仏教における僧院と世俗性」に関する情報に重点を置いたデータベースをドイツのハンブルク大学との連携によって作成・公開し、国際的波及性を高めてフィードバックを促す。

(III) (I) と (II) の成果に基づいて、インド仏教における僧院と世俗性との関係について、総合的な観点から考察する。

コロナ禍や国際情勢の行く末が案じられる昨今であるが、多くの方々からご指導とご鞭撻を賜りつつ、大きな成果が得られるよう尽力する所存である。

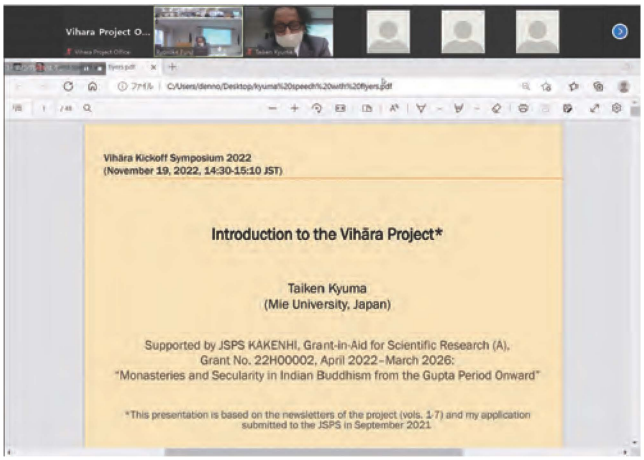
（文責：研究代表者・総括班責任者 久間泰賢 三重大学）

※上述の内容は科研申請書に基づくものである。

キックオフシンポジウムおよび研究会の開催

2022年11月19日に、東京大学東洋文化研究所（3F大会議室 14:30–18:30）において、科研キックオフシンポジウム（Vihāra Kickoff Symposium 2022）が開催された。シンポジウムは一般公開制であったが、コロナ禍により会場使用に際して人数制限が設けられていたため、当日は関係者（講演者・プロジェクトメンバー）のみ会場に参集し、一般の参加者についてはZoomミーティングを通じてオンラインで参加していただくことになった。また、翌20日には同一の会場で、各研究班のプレゼンテーションと集中討議から成る研究会（原則として非公開、09:45–18:00）を実施した。この研究会の詳細については、本号における各研究班の報告に譲りたい。

19日のシンポジウムの冒頭では、研究代表者の久間が“Introduction to the Vihāra Project”と題して発表を行った。その際、本研究に先行する科研プロジェクト（2018～2021年度）の活動報告や、それを通じて得られた結論や今後の展望にも言及しつつ、今回のプロジェクトの趣旨について解説した。とりわけ方法論上の留意事項として、本研究の主要な論点である (a) 在家主義（在家信者）、(b) 世俗権力、(c) 密教思想の3項をいかに分析し、かつ総合すべきかという視座の重要性が強調された。たとえば (a) を分析する場合は、外来の巡礼者・土着民、上層民・下層民（階級、貧富の差）、識字者・非識字者、仏教徒・非仏教徒のような複数の軸を常時意識しつつ、(b) および (c) と総合的に関連付けていくことになる。一方、(b) についても大王朝だけですべてを説明しようとするのではなく、地域の政体・共同体に対する眼差しが求められるであろう。また (c) に関してはすでに多数の論点が存在するが、いずれにせよ教理史的側面のみならず、世俗権力との関わりも含めた多角的視座が必要になることは言うまでもない。最後に、在家仏教研究のさらなる深化が今後の重要な課題であるとするAlexis Sanderson氏（オクスフォード大学）の講演（詳細についてはニューズレター第7号を参照）に言及することで、発表が締めくくられた。その後に行われた講演の要旨は次の通りである（順に各chair担当の古井龍介、エリカ・フォルテが執筆）。



久間氏による趣旨説明

☆ ☆ ☆

Abhishek Amar氏（ハミルトン・カレッジ）
“Interactions with Built Environments of Bodhgaya”

本講演でAbhishek Amar氏は、政治権力や僧俗共同体との諸相互作用により、いかにボードガヤーの造られた環境が変化していったかを、中世初期を中心とする遺跡・遺物の分析を通して論じた。はじめに、玄奘の記述に依拠してカニンガムによってなされた、マハーボーディ寺院を中心とする遺跡再建の問題を指摘した。その上で、アショーカによるブッダ成道の地としての記念に始まる、初期歴史時代から中世初期にわたるボードガヤーでの建造の歴史を、菩提座・菩提樹を祭る廟からマハーボーディ寺院と付属する僧院へと、活動の中心が遷移する過程として説明した。続く遺物に関する議論では、まず彫像について、ブッダの生におけるボードガヤーの位置づけもあって触地印仏像の流行と発展が見られる一方、大乗的な菩薩像も奉献されるなど、大乗・金剛乗など様々な教派の活動が認められることを論じた。また、海外に持ち去られたものを含む膨大な数の小仏塔が奉献されており、そこには帰依者による聖域での埋葬への志向があることを提起した。

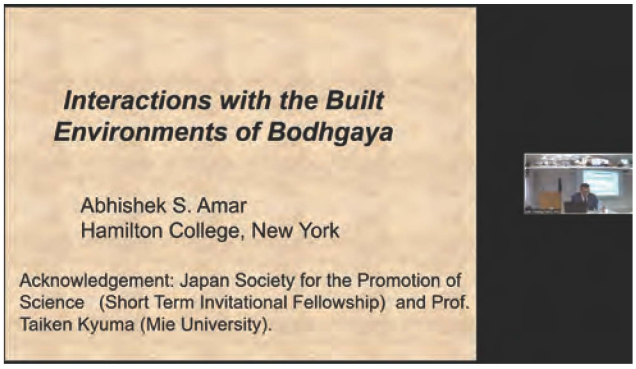
ボードガヤーにおける儀礼・帰依活動については、柱・欄循の浮彫における菩提座・菩提樹礼拝の描写と玄奘の記述とが一致することを指摘した上で、彫

Amar氏による講演

像台座の帰依者とその家族の姿や小仏塔の台座の浮彫、奉献板に、燈明・香炉・七宝・食物・花輪・写本と合掌による礼拝や写本自体の礼拝の様子が描かれていること、また、像銘には大乗帰依者による活動が認められることを論じた。

世俗性については、まず帰依者の出自について、碑銘から巡礼者の存在が判明する一方で、ナーランダーなど周辺の遺跡で発見された資料からは、在地の帰依者による僧院共同体との交流が認められることを指摘した。ビクシュについては、チベットを中心に出身地を明記する事例を挙げた。政治権力とのつながりについては、在地ではピーティパティと呼ばれる王権との関係が、また国際的にはスリランカやビルマの王権との関係、特に後者による寺院修復が、それぞれ碑文に確認されることを説明した。

以上のようにボードガヤーの造られた環境の変遷を解説した上で、大乗・金剛乗などの新たな教派運動が及ぼした影響およびそれによるボードガヤーの重要性低下の可能性を問題として提起した。前者については、様々な教派の思想・実践の流入がボードガヤーの造られた環境に新たな層位を加えたこと、また後者については、同地における教派を超えた盛んな儀礼・帰依活動や海外からの訪問者が残した碑文などに見られるように、その重要性はむしろ増大し、仏教以外の宗派にも及んでいたことをそれぞれ指摘して講演を終えた。



Amar氏の講演の様子

☆ ☆ ☆

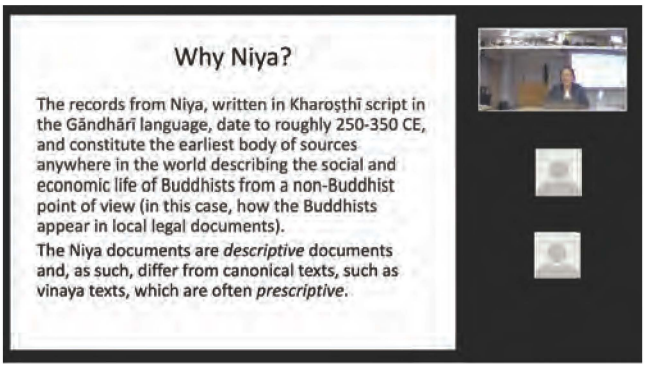
Valerie Hansen 氏（イェール大学）
“The Lives of Buddhists in Niya, ca. 250-350 CE”

続いてValerie Hansen氏が講演を行った。同氏が用いた主な資料は、タクラマカン砂漠の南東端で3世紀から5世紀にかけて栄えた古代クロライナ（Kroraina 楼蘭、鄯善）王国の遺跡の一つ、ニヤ（Niya 尼雅、別名Caḍotaチャドータ）で見つかった文書である。Hansen氏はその文書に基づいて、東アジア（タリム流域）の初期の仏教社会を紹介した。同地で発見された文献は現在では約1000件を数えるが、そのうち700件以上は、Aurel Steinが1901年から1930年にかけて4回の調査活動を行い、収集したものである。これらの文書は、主に行政的な事柄を内容としているが、財産、結婚、奴隷の所有に関する紛争や問題を扱ったもの、そこに僧侶（śramaṇa, bhikṣu, sthavira）が関与しているものもある。文書のほとんどは木に書かれたものであり、カローシュティー文字のプラークリット語を用いた、およそ紀元後250年から350年のものである。

Hansen氏による講演

Hansen 氏は、これらの文書が僧院の内部で作成された宗教的なものではないことから、「世俗的」視点を通じて、仏教徒の一般的な社会生活を新鮮なかたちで、かつ直接的に見ることができるという点を強調した。換言すれば、同文書は、僧侶と一般人、より広義には僧院と世俗社会がどのように関わっていたかを明らかにする最初期の資料となる。ニヤの僧院に所属する仏教徒は、財産を持ち、妻子や使用人を抱える住居を持っていたようである。また、こうした僧侶は伽藍には住まず、実家に暮らし、時に僧院に通い、儀式を行ったり、仏教界の会合に参加したりしていたことを窺わせる文書もある。これらは、伝統的なインド仏教の理念とは大きく乖離するものであった。

上記の資料から見えてくる注目すべき別の側面として、僧



Hansen氏の講演の様子

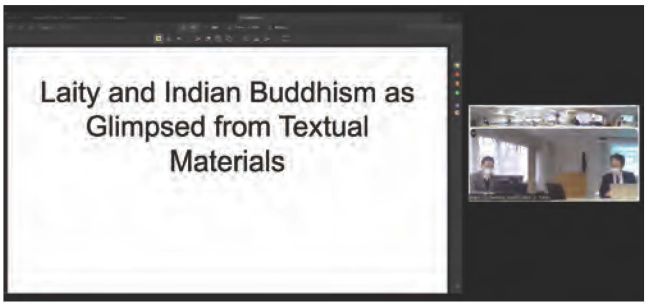
院が独立した意思を持ちながらも、ある意味で世俗の権力に服従していたようである点が挙げられる。僧侶の組織は王国内の世俗的な組織と並行的関係にあっただけでなく、少なくともあるケースにおいては王が仏教界の規則を発出することで、僧侶の権威を裏付けていたのである。

講演後には、参加者との間で活発な質疑応答が交わされた。主要な論点の一つは、上述の文書中に描写されているニヤの仏教僧の振る舞いが、より幅広い解釈の可能性を持つということである。彼らにはインド仏教のバックグラウンドがないので戒律に対する理解度が低かったという説もあるが、そうではなかった可能性も考慮すべきだとする議論がなされた。この点に関連して、仏教の地域的適応性、信徒と僧侶の間の規制、僧籍の解釈・理解の異なり、僧侶と世俗の分離の度合い、そしてニヤのコミュニティ内ではśramaṇaという語が在家の（優れた）仏教者を含意していた可能性などについても検討が行われた。

（報告：古井龍介 東京大学東洋文化研究所／エリカ・フォルテ 京都大学人文科学研究所／久間泰賢）

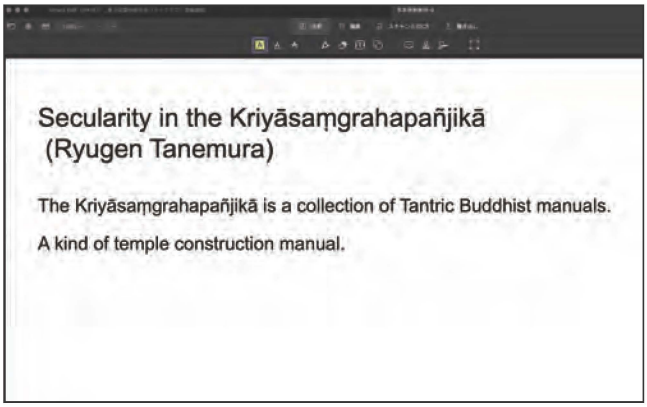
写本文献資料研究班の発表要旨

写本文献資料研究班の扱うサンスクリット写本を中心とした文献資料は、インド仏教僧院と世俗の関係を検討する上で地域や時代を含め様々な観点を提供し得る。これまで、そのうちどのような観点からまず着手するかを議論してきた。今回のシンポジウムでは、班長の宮崎の他に主要メンバーの中から4名が加わり、それぞれの観点を紹介しつつ、今後の展望について共同で発表を行った。



宮崎氏の発表の様子

宮崎は、今後の研究班の基本的な方針を提示し、在家仏教徒の基本的な性格を整理した後、*Bhāvanākrama*初篇にも引用される*Rājāvavādaka*という大乗経典を取り上げ、そこに説かれる王の描写を紹介した。これは文献資料の持つ多様な可能性の一つを示すものである。続いて、種村隆元氏（大正大学）は、Kuladatta著の*Kriyāsaṃgrahapañjikā*が、(1) そこに規定される儀礼が公共空間における儀礼であること、(2) 主たる外護者として王権を想定していること、(3) 規定されている寺院のプランが、世俗的な建築物のそれに類似していることなどから、僧院と世俗社会の関係に関する状況証拠を回収できることを述べた。望月海慧氏（身延山大学）は、Dīpaṃkaraśrījñānaが密教儀礼である三昧耶戒を20の項目から紹介する*Sarvasamayasaṃgraha*という著作を取り上げた。この著作では、小乗の波羅提木叉、大乗の菩薩戒、真言乗の三昧耶戒が対比され、真言乗の優越性が論じられる。菊谷竜太氏（高野山大学）は、いわゆる「Siddhāmnāya」とよばれる文献に注目し、梵文原典・チベット語で遺された伝記・史書類を対照しながら、中世インドにおける成就者（siddha）を中心に僧院内外という境界性について考える可能性を示した。最後に、加納和雄氏（駒澤大学）はチベットのサキャ寺に伝存する四帙からなる『十万頌般若』の梵文写本について報告した。作品自体は珍しいものではなく、1283–1284年にカトマンズの書写職人らに筆記されたありきたりのものであるが、施主名が目を引く。「北道、サキャ寺在住」「有雪国の釈比丘Kīrtidhvaja」と奥書に記されるその名前は、本名Grags pa rgyal mtshanを梵訳



種村氏の発表資料

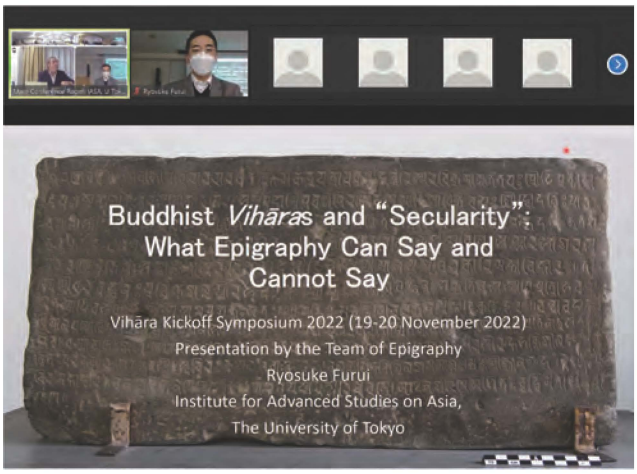
したものである。この人物がYar lung/klungs lo tsā ba（1242–1346）に同定される可能性は、彼が携わったテンギュル諸作品の奥書所載の活動の軌跡などから推定される。このようにチベット人の施主がカトマンズの職人に経典書写を依頼したのは、1280年に逝去したパクパの追悼のためであった可能性が考えられる。

このように、文献資料には様々な観点から仏教と世俗の関係を検討できる可能性がある。本研究班では、海外の研究者にも協力を仰ぎながら、できる限り多様な文献を取り上げ、さらに可能性を探っていきたい。年2回程度研究会を開催し、着実に研究を進める予定である。

（報告：班責任者 宮崎泉 京都大学）

碑文資料研究班の発表要旨

碑文資料研究班では、「仏教ヴィハーラと「世俗性」：碑文は何を語れ、何を語れないのか?」と題する報告を行い、これまでの研究を検証するとともに、今後の研究の方向性を展望した。前プロジェクトにおいて本研究班は、中世初期南アジアの仏教僧院を、同時代の社会経済的文脈と権力関係に埋め込まれた物質的・社会的実体として描くことを目的として碑文研究を行った。その成果は近刊の『仏教・法・社会』誌特集号（7号）に結実し、南・東南アジアの諸事例をもとに、支援者・施与物における共通性と差異、また仏教僧院を指す語の多様性などを明らかにできた。しかし、今プロジェクトのテーマである「世俗性」については、銅板文書・石碑の双方を含む仏教関連碑文の限界も露呈した。非仏教碑文との比較からも明らかなように、これらの碑文は、政治権力や僧俗双方による土地寄進・造像などの援助、および礼拝・経典の書写・ビクシュへの衣食等の供給・僧院修復など僧院内での施与物の用途に言及する一方で、王権への儀礼的奉仕や僧院外社会集団との交流などにはほとんど触れていない。この限界を超えるには、DHARMAプロジェクトとも連携してより多くの非仏教碑文を収集し、それらとの比較を進めつつ、儀礼書や中国仏教僧による記述、考古遺物、特に像銘を相補的に用いることで、仏教碑文の特徴を明らかにし、その読解を深める必要がある。そのためにも、他研究班とのより一層の連携が求められる。

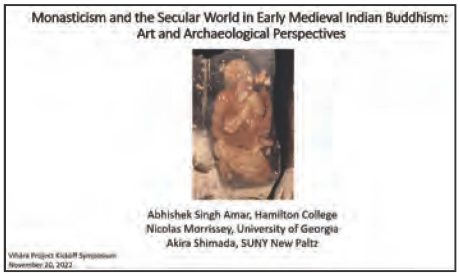


古井氏の発表の様子

（報告：班責任者 古井龍介）

美術・建築・考古学研究班の発表要旨

美術・建築・考古学研究班3名（島田、Amar氏、ジョージア大学のMorrissey氏）は、"Monasticism and Secular World in Early Medieval Indian Buddhism: Art and Archaeological Perspectives"と題した共同発表を行った。はじめに島田が前回科研での班の研究成果を総括し、今科研では2021年に立ち上げた僧院遺構データベースのさらなる充実を図りながら、西デカンのKanheri 石窟など、



美術・建築・考古学研究班の発表資料

長期にわたって栄えたいくつかの仏教僧院の伽藍建築と美術資料の集中的な調査を行う予定であることを報告した。続いてMorrissey氏とAmar氏が、今科研の主要な調査対象となる遺跡や資料について発表した。Morrissey氏は西デカンの仏教石窟に刻まれた、供養者像を伴う仏菩薩像（6〜8世紀頃）を取り上げ、これらの尊像を在俗信者が奉献し、供養する行為が、6世紀以降のデカン地方の仏教僧院の活動を経済的に支えていた可能性を、Kashmir Smast出土の銅板碑文の内容を援用しながら指摘した。Amar氏はNālandā周辺の未発掘の僧院遺構（Juaffardih Mound, Begumpur, Rukministhan, Garhpar）を紹介し、これらの小規模僧院がNālandāなどの大寺院や、在地の領主や、在俗信者とどのような関係性を保ちながら存続していたのかを、考古資料の分析を通じて明らかにしたいという研究の展望を述べた。

会場の様子

（報告：班責任者 島田明 ニューヨーク州立大学ニューパルツ校）

データベース作成班の発表要旨

Vihāra プロジェクト第一期（2018–2021年度）およびその前身であるVikramaśīlaプロジェクトと同様に、本科研プロジェクトにおいても、研究知見蓄積のためのプラットフォームとして、Indo-Tibetan Lexical Resource (ITLR) データベースを利用する（ITLRおよびデータベース作成班のこれまでの活動については、三重大学機関リポジトリ収載のVihāraプロジェクト第一期ニューズレター第1、4、7号参照）。Vikramaśīlaプロジェクトから現Vihāra プロジェクトまでの移行過程において、研究の焦点が人物・文献から僧院およびその活動へ、そしてさらに僧院と世俗社会の関係性へと移るのに従い、重点的に入力を行うべきデータベース項目の選定も、データベースに要求される仕様もまた変化してきた。その間、データベース作成班は各年度ごとに2〜3回程度、データ入力セッションという形式での研究会を開催、入力項目の選定やデータ入力に関する技術的な問題等を議論してきた。現プロジェクト初年度となる2022年度は、11月のキックオフシンポジウムを挟んで計3回の研究会（9月、12月、2月）を予定し、次年度以降も同様なスケジュールでの活動を見込んでいる。なお、2020年以降パンデミックのため開催が停止していたITLRデータベース編集会議が2023年3月に再開されるが、当班責任者は同会議への出席を予定している。

苫米地氏の発表の様子

（報告：班責任者 苫米地等流 人文情報学研究所）

外部評価班の発表要旨

発表の冒頭で、共同責任者の久間が外部評価班の概要について説明を行った。前責任者の小倉智史氏（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所）の議論（ニューズレター第4号を参照）をガイドラインとしつつ、外部評価班の対象とする地域を中央アジア・西アジア・東南アジアに区分したうえで、主な課題を確認した。

次に、本研究班の共同責任者であるフォルテ氏が、中央アジアの東部、すなわちタリム地域に焦点を当て、紀元

今後の予定

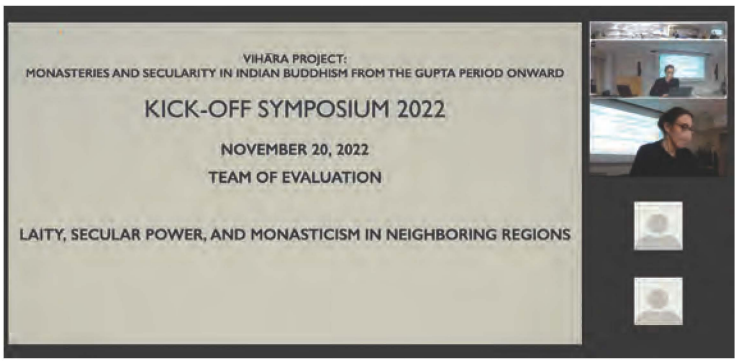
2023年9月に、写本文献資料研究班による国際ワークショップが開催される予定です。第一線で活躍している海外の研究者とともに、文献の講読および討議を行います。今回は国内を拠点として、ハイブリッド形式で実施します。

活動報告

2022年11月5日から12月24日にかけて、2022年度JSPS外国人招へい研究者（短期）プログラム（研究題目：Bodhgayaの学際的研究）を通じて、美術・建築・考古学研究班および外部評価班メンバーのAbhishek Amar氏を招へいしました。滞日中は、キックオフシンポジウムでの講演（11月19日、オンライン）に加えて、東京大学東洋文化研究所（11月23日、オンライン）・京都大学（12月3日、対面）・名古屋大学（12月13日、対面）でも講演会を開催しました。同氏からは、本プロジェクトの今後の活動方針についても有益な助言を得ることができました。また、2023年1月から2月にかけて、美術・建築・考古学研究班がインドでフィールドワークを実施しました。今回は Kanheri などを対象として調査を行いました。2023年2月18日から19日にかけては、写本文献資料研究班が大正大学で国内研究会を開催しました。当日は同研究班メンバーの宮崎泉氏・望月海慧氏の主導により、Atiśaに帰せられる*Sarvasamayasaṃgraha*を講読し、討議を行いました。

以上の活動の詳細については、ニューズレター第9号で報告する予定です。

1千年紀の中央アジアにおける仏教の発展という観点から、本プロジェクトのテーマについて述べた。今年度の目標として掲げたのは、特に、古代クロライナ王国の物質的文化に裏付けられる世俗権力や世俗社会との関係における仏教社会について検討することである。2022年11月に開催されたキックオフシンポジウムでは、Valerie Hansen氏を招いて、古代クロライナ王国の行政中心地のひとつであったニヤの遺跡から出土した文書に対する氏の見解を発表していただいた。その詳細は上記の講演要旨で触れた通りだが、これらの行政文書を通して、ニヤの仏教社会の様相や、在家社会・世俗権力との関係を窺い知ることができる。本研究班の今後の活動では、仏教徒の活動に関する最も古い物質的証拠が4世紀にまで遡る古代クチャ王国を主たる対象として、仏教と世俗というテーマを視野に入れつつ調査する予定である。



フォルテ氏の発表の様子

フォルテ氏の発表に続いて、本プロジェクトに対する重要な貢献者の一人であるAndrea Acri 氏（フランス高等研究実習院）が、Zoomミーティングを通じて自身の新たな研究プロジェクト“Maritime Asian Networks of Buddhist Tantra (MANTRA)”について説明を行った。同氏のプロジェクトは東南アジアを中心としたタントリズム文献の伝承形態に光を当てようとするものであり、発表後には本科研プロジェクトとの連携の方法について討議が行われた。なお、本研究班の活動として、前責任者の小倉氏がチベット語およびペルシア語版の**Āryavasiṣṭhasūtra*の講読会を企画していることも付け加えておきたい。

（報告：班共同責任者 エリカ・フォルテ／久間泰賢）

［ヴィハーラ プロジェクト］
印刷 株式会社コームラ **Vihāra Project 第8号**
2023年3月10日発行
科学研究費補助金基盤研究（A）
「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」ニューズレター
編集・発行 Vihāra Project 事務局
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577 三重大学人文学部 久間泰賢研究室内
三重大学 MIE UNIVERSITY